

第81回
箱根駅伝

総合4位

全ドキュメント

05年1月2-3日

敗れざる者たち

「C」のタスキは どんな歌をうたったか

沢木耕太郎著『敗れざる者たち』という作品がある。

栄光を逸してもなお燃える心を抱えた男たちのドキュメントだ。

新春1月2-3日。箱根駅伝往・復路全217・9キロを取材しながら、

中央大学の選手たちの姿がそのタイトルを思いおこさせた。

苦しい闘いだっただ。にもかかわらず、中央大学は強かった。

総合4位。「限りなく1位に近い4位」(阿部三郎理事長)

という評言は決してオーバーではないだろう。

「C」のタスキをつないでひた走る選手たち、小旗をうちふるOBらの応援の波……

それらが織りなす「ハコネという物語」。

05年、中大チームはどんな歌をうたったか。

学生記者取材班

猛然と高橋はダッシュした

2区・鶴見(横浜市)中継所。ウォーミング・アップに移ろうとする直前、テントのなかで立ち上がったエース高橋憲昭(法4)以下すべてレース時点に、ケータイ電話が入った。「はい」「はい、分かりました」。短く答える。田幸寛史監督からだった。1区・上野裕一郎(法1)を追走する運営管理車からの伝令である。

「(上野が)遅れている」という連絡は、女子マネージャーからも刻々と入っていた。「私たちはタイムキーパーで、5キロごとに駒澤との差、すぐ前の学校との差を伝えました。上野君のことが心配で、心配で」(大橋朋子||理2)

高橋がコートを脱いだ。腕時計に目をやる。「まだ2分あるのか」とぼつりとつぶやく表情を、日本テレビのダイジェスト特集「もうひとつの箱根駅伝」(1月15日放映)は拾っていた。

高橋は、ラインから東京寄りに10メートルほど駆けて、上野を待った。

闘いの火ボタン。20人の選手が一齐にスタートした



1区・上野裕一郎

1位東海以下、ぞくぞくと2区走者にタスキが渡っていた。

「がんばれ！上野！」。両手で招くようにして叫ぶ。上野が息をきらしながらやってきた。もつれるように倒れこむ新人の背を、「よくがんばった」とねぎらうようにポンとたたいて、高橋は猛然とダッシュした

――。

トップの東海大から3分31秒遅れ、オープン参加の関東学連選抜を入れて全20チーム中19位。だれもが期待した大型ルーキー・上野に何があったのだろう。そのとき高橋の脳裏には、あるいは2年前の自身の姿がダブってよみがえったのではないか。

だからこそ、ここは負けられない闘い、と心中さらに期するものが。そして、ここから、「敗れざる者たち」の乾坤一擲のドラマは始まったのである。

大手町：熱気のカウントダウン

2005年1月2日午前6時すぎ
取材班の福田と西原は、千代田区大手町・読売新聞社前にいた。都心も正月松の内のおだやかな静けさを装うなかで、この一角だけが異様である。まだ明けやらぬ暗がり、大会運営の白いスタッフコート部隊がぼよんと浮かび上がる。それぞれの持ち場に移動し作業に入った。へ東京・箱根間往復大学駅伝競走。ス



2区・高橋憲昭

ターゲット地点に横幕が張られる。日テレの中継カーの周りも、スタジオや各地点との人念なチェックだろう、ケータイ片手にクルーの動きがあわただしくなった。1区のランナーたちが周辺を軽くランニングし始めた。白み始めた歩道で、手配りの「スポーツ報知」をもらった。へ駒大V

4 100%と書き立てている。

冗談を、これで「客観報道」といえるのか、と福田はムツとした。「中大スポーツ」の信念報道のほうを信じた……。「今年の優勝は、駒大、中大、日大のどれか」と話しかけてきたおじさんには、「中大がやりますよ、今年は」と答えた。

6・50 スタートラインに参加全大学のマネージャーが集まりエントリー表を配布。エントリー表のメンバー変更が行われる。多くの変更のなか、駒大のメンバー変更にどよめきの声。中大も2選手を入れ替えた。
7・00 一帯がウワーンとなった。参加19大学の応援が始まったのだ。7時解禁。マックスで響きわたる太鼓にプラスバンド、応援団とチ



長田孝弥さん

上野に何が：

上野に何があったのか。

「前に出たり、後ろに下がったり。

ムダな動きが多い。どうも落ち着きがありませんね」。テレビ解説者の瀬古利彦・エスピー食品監督は期待のルーキーの走りを見て、前半から不安を口にした。

佐久長聖時代に1万メートルで12年ぶりに高校記録(当時)を更新して中大入りした1年生。日テレも1区の目玉として「上野班」をつくってフォローしていた。

8キロ手前で、集団から離れた。サングラスで表情が読めないが、長身を利用した大きなスライド走法が伸びない。ずるずると後退した。

「タスキを渡してバタリと倒れた上野は、スタップ3人がかりで近くの産婦人科病院に運ばれた。口には酸素吸入器。取材班の津江は報道陣と一緒に後を追った。

「右足のふくらはぎがけいれんしたらしい」「初めての20キロ台の緊張と、寒さもあったかもしれない

8(96)年の総合優勝、その時50年以上休むことなく箱根を見に来ていた長田さんが病氣(心筋梗塞)でこれなかったこと」

7・35 ゼッケン確認。昨年の順位で点呼。サングラス姿の上野は少し緊張気味だ。日大が大幅に遅れ、大会スタップを怒らせる。

7・50 第一走者がスタートラインに集合して、点呼。「中央大学」の名があがると、「行けーっ、中央」「上野ー、がんばれー」と周りから一番大きな声援が飛んだ。上野は入念にストレッチ。選手同士の駆け引きもあるか、駒大・太田が上野に声をかける。上野は日体大の鷺見としばし歓談。長野・佐久長聖高の1年先輩である。

7・57 各選手がジャージを脱ぐ。監督の握手に送られて上野はスタートラインに立った。腕を組み、地面を見つめる。もう一度、鷺見に声をかけた。

8・00 1分前からカウントダウン。上野は前列。そして一斉にスタートした。大手町がグワンと振動した。

大職員。昭和28年卒)

「昭和23年以來きていますよ。今年で58年めですね。今では一番の古株になってしまいました」

——箱根の思い出といえは？

「昭和23年の、最初の箱根駅伝で自動車部の木炭車(トラック)に乗って応援したことですよ」

——生き字引ですね。長田さんにとつて箱根とは？

「私を元氣にしてくれるものですよ」

■ハコネ人②長内了法学部教授(応援部部长)

——先生にとつて、箱根とは？

「青春、だね。25年間箱根駅伝を見にきている。1番の思い出は平成

アガールの熱血応援。

陣取りは真つ暗闇の4時半のころから始まるのだという。だから、年ごとに場所が変わる。中大はCIT I B A N Kが入るビルの前、去年よりも東京駅寄りに陣取った。

遠藤亮平応援団長、荒川勝彦副団長(ともに法4)ともども、キリリと羽織袴の出陣である。

■ハコネ人①長田孝弥さん(元中

な」。病院の裏口に待機した10数人の報道陣から、そんな会話が聞こえた。

ほんとに、この朝の冷えこみはひどかった。大手町では1・6度、じんじんと冷えが足下からはいあがつてくるようだった。9時を回った鶴見は1・1度。上野投入が別の区間だったらどうだったろう……寒さに凍えながら、シロウトの特権で津江はそんなことを考えたりした。

じじつ、監督にはその戦術もあつたようである。「ただ、1区で考えた選手が故障で、他に選択肢はなくなつた」と、のちに関係者から聞いた。出走直前まで何が起きるか分からない。ハコネにはつきものの怖さだ。

屈辱からの再起

高橋は、最後で初のエース区間「花の2区」23・2キロを、快調に飛ばした。前との大きく開いた差を詰め、帝京、大東をとらえる。戸塚直前で専修もかわし、順位を15位に押し上げて、3区・小林賢輔（商2）にリレーした。

タイムは1時間8分46秒。区間3



3区・小林賢輔

位とはいえ納得のいくものだったにちがいない（区間賞は山梨学院・モカンバだった）。

2年前の悪夢……。5区・山登り区間に、高橋は急ぎよ投入された。前日朝、つまり元旦のメンバー交代。だが、走つたことのない地獄の山登りに、心も体も、ついていけなかつた。奇しくも上野と同じ、区間19位。3位でもらつたタスキを12位にまで下げた。

屈辱からの再出発だった。昨年は9区を走つて区間5位。夏以降、さらに調子をあげた。7月インカレで1万メートル4位、10・11出雲駅伝、11・7全日本駅伝ともに区間2位。さらに11・23府中ハーフマラソンで

は1時間2分24秒で堂々優勝のテープを切つた。当日1月2日発行の「中大スポーツ」箱根駅伝特集号が「古豪復活へいざ」と一面に掲げた「中大の顔」も、高橋だった。

千葉・白子合宿

どんな鳥も想像力以上に飛べない

大学間の闘いがあり、自己との闘いがある。同じチーム内で選手間の闘いもある。

朝まだき、ほの暗い海岸ばたのロードを、主将・家高晋吾（商4）を先頭に18人の選手たちがひた走る。朝6時から、約1時間の17キロ走だ。このあと、朝食と休憩をはさんで、午前練習。そしてまた、昼食と休憩を挟んで午後練習……。

昨年末12月1日から7日まで、中大駅伝チームは千葉県白子町で直前の合宿に入った。表情を引き締め、「目の色」が違う選手たちに、取材班の滝沢は出会つた。

選ばれた18人である。「他の選手には、こんどの箱根出場はない、とはつきり伝えました」と田幸監督は



言う。しかも合宿のあとに決まる登録選手枠は16人だ。そこからさらに年末・最終選考で14人に絞られる。そして本番の箱根を走ることができるのは10人。厳しい競い合いである。これまで11月末だった合宿も、より本番直前に切り変えた。

監督は言う。「今回の合宿では、あえて中心選手にメンバーを絞つたが、それでも選手の間意識の二分

化が気になります。箱根を走れるか、走れないかぎりぎりのラインの選手は、箱根へ出場することがゴールになつてしまいがちです。チームの選考で目の前がいつぱいになつてしまふ。これは選手選考でも重要です。

出ることがゴールの選手では箱根は走れない。同時に「箱根は通過点」とその先をありありと展望する想像力と意志と力がなければ、箱根を「征服」できないだろう。

聞いてみた。不出場となつた選手のことでも大変でしょうね。

「いろいろな事情を抱えた選手も確かにいるのでしようが、私はあまり気にしません。というよりむしろ、気にしないように、気にしてはいけな

いと思つていきます。なぜなら、これはサークル活動・同好会ではない、

競技スポーツなのです。事情を抱えながらもそれを振り切り、結果を出すことに意味がある。とにかくベストをつくす。これが大切ですよ」

「忘れた優勝とり戻す」 気鋭の新監督

出雲、全日本駅伝ともに、中大は3位、と順調な仕上がりをみせた。

大方の目にはそう映つたのだが、監督の見方は違つた。「いいえ、大きな誤算でした。決して満足はしていません。優勝を狙つていましたから」と。

02年から2年間専属コーチをつめたあと、04年監督に。みずから中大選手として箱根駅伝を経験し、実業団・エスビー食品のコーチをつとめた。経験プラス理論派の気鋭、30代監督の就任である。

それに合わせて、「4年生主体のチーム」が仕上がつてきた。

「コーチ就任から4年間で一つの実績をあげたいと思つてきたが、4年生がしっかりしておかかげ、そのチャンスが1年早まった。チャンスだと思つたところで勝負をかけ



田幸寛史監督

なければ意味がない。いろいろ批判もあるところですが、イチかバチかの勝負を毎年やりたい。勝ちに行くことを忘れてはいけな

いと思つてい

ます。中大は6連覇を果たした昭和39(64)年以降は、平成8(06)年の1度しか優勝経験がありません。

勝つことを忘れてい

る。そのことを断ち切る意味でも勝ちたい」

ほら、アレ、と指さす視線の先には、宿の壁に張られた「駒沢合宿」の写真。他校もよく使う「駅伝選手宿」なのだ。駒沢は昨年ハコネ3連覇のあと、ここで春合宿したのだという。「打倒駒沢」古豪復活のV——監督の目が燃えていた。

6時前、宿から起き出して整列した選手を前に、「よろしくお願ひします」と家高主将がキリツとあいさつする。「きょうは報道陣もみえていますので、しっかりとやりましょう」

キビキビしたチームのまとまりが、滝沢にはじつに頼もしく見えた。そばにたたずむ女性がふたり。女子マネージャーだった。

「私は駅伝、特に箱根駅伝が昔から大好きで、大学に入つたらぜひマネージャーをやりたいと思つていました」(菊池佐知子Ⅱ文2)

「中学・高校と陸上部のマネージャーをしてきたのですが、大学でも駅伝チームのマネージャーをやりたいと思つて。まだよく分からないのですけど」(半田歩Ⅱ経1)

テレビ・クルーも2泊3日で選手たちを追つていた。「もうひとつの箱根駅伝」企画取材班だつた

■ハコネ人③北田一勝・制作会社
ディレクター

——注目ゆえの密着取材ですか？
「もちろん、中大は注目して

梨学院なども密着しています」

——他大学と比較して中大の特徴は？

「中大の選手は自由で各々の選手が個性を生かした練習をしていますよね。実際に他の大学と比較すると分かりますが、なかには何から何まで『お受験』のように練習メニューがみっちりと組まれている大学もありますから（笑）」

そして、こう言った。「ただ、個性重視が本番でうまく現れるかどうか、そこですよ」

小林12位↓池永7位↓中村6位に

高橋がつくった追い上げのリズムを小林が引き継ぐ。昨年の不調から



4区・池永和樹



5区・中村和也

カムバック、3人抜きで12位に浮上した。

そして4区、平塚―小田原区間21キロ。全日本駅伝のアンカーをつとめ区間2位と堂々の走りをみせた池永和樹（理3）に期待がかかった。

4月から新主将でもある。快走する。安定感のある走りです。区間2位のタイム、新エースの貫禄をみせつけた。前をいく5校を食って、7位に押し上げていた。

往路の最終5区。小田原から箱根・芦ノ湖へ20・9キロ、山登りの難所に2度めの中村和哉（法3）が挑んだ。日テレの中継カメラは、機関車のように駆け上り途中ダウンした日体・北村を、それ以上のピッチで

これまでの区間記録を2分以上縮める1時間9分台の驚異的な区間新をマークした順天堂・今井を、追いつけていた。15位だった今井が中村をも抜き去っていく。テレビでは、これが中村のほとんど唯一のシーンだったのは、巡り合わせの不幸である。中村はその今井につぐ区間2位の健闘だったのだ。終盤、足の爪は割れていた。「痛みは忘れて走った」。順位を1つ上げ、往路の結果は6位。翌日の復路に十分な期待をつないだのだった。

母校と心つながる「タスキ」

小林が健闘した戸塚―平塚間に、一遍法師の踊り念仏で名高い遊行寺（藤沢市）がある。踊り念仏の由縁

が選手たちを試すように急にせり上がる、遊行寺の坂。沿道には、多くの駅伝ファンが集まる。白地に赤い「C」マークの旗もひるがえる。中央大学の学員応援団―取材班の滝沢は走り回って声を聞いた。

■ハコネ人④片岡久典さん（41年経卒）藤沢白門会事務局長

「箱根駅伝があることもあって、神奈川県には国道1号沿いに7つも白門会があるんですよ。藤沢白門会は今年でちょうど10周年。『駅伝応援委員会』があつて、2カ所に別れて40人から50人の応援部隊を出しています。箱根の芦ノ湖でも応援。みなさんとても熱い。箱根が終わらなければ正月はスタートしない、そんな感じだな」

「6連覇（1959―64年）の最後の頃、ちょうど学生でした。六郷橋で2分ほど日本大学に離されていたが、川崎では並び、最後は優勝みぞれ交じりの天候で、とても感動した。今でもその光景が忘れられずに箱根を応援しているんです」

■ハコネ人⑤斎藤和徳さん（60年法卒）鎌倉市役所白門会幹事

「箱根応援は、母校ということを感じる瞬間ですね。毎年連続出場して、常に優勝候補でいることに誇りを感じます。顔も知らないけれども選手とつながっているような気がして応援をしています。中大の『伝統』を感じるときですね」

■ハコネ人⑥杉山博保さん(45法卒)／⑦三橋嘉孝さん(44年経卒)

——毎年、この場所で応援ですか。「昨年は、芦ノ湖で応援をしてきましたですよ。今年は地元で応援をしています。平成8年に駅伝の優勝を記念して、鎌倉市役所白門会は結成され、それ以来毎年応援しています」

——駅伝同様に、他のスポーツも？

「野球も応援していますよ。去年は残念ながら行けなかったんですが、そういうときにかぎって優勝するんだよね(笑)」

全国に散らばる学员にとつて、ハコネは自分と母校をつなぐ「タスキ」に見えてくる。

野村が下る、家高が追う

1月3日——芦ノ湖付近は、整備されたレース道路を除いて、雪が深かった。8時、復路の闘いがスタートした。

中大は、「山下りのスペシャリスト」、切り札、野村俊輔(法4)である。



6区・野村俊輔

2年連続区間賞。「区間新記録・57分台を狙います。それを実現することによって4年間の栄光を飾りたい。それしか頭にありません」と白子でも断言した、4年最後の舞台。だが、6番めのスタート、トップ・東海大と4分25秒、2位駒沢と3分55秒の差を、どこまで詰められるだろうか。優勝のためには、「先手必勝。駒沢の前を走る」、悪くても「往路で駒沢との差2分以内なら、野村で一気にイケル」(木下澄雄総監督)との戦前の読みは、もう度外視しなければならなかった。最初の5キロを登り切って、長身のスペシャリストは九十九折りの坂道を飛ぶように下っていく。快調



7区・家高晋吾

そのものと見えるのだが、ヘアピンカーブの大平台、小湧園前のポイントで中継車はその後ろ亜細亜・板倉が「野村のタイムを超えるハイペース」と伝え始めた。

坂を下りきって残り3キロ、箱根湯本から小田原まで平地に変わる。これが選手には「体の切り替えが難



8区・奥田実

しく、上り坂に見える」そうである。経験の野村はそこで板倉のタイムを上回った。が、わずかに5秒差(1時間0分1秒)。3年連続の区間賞だが、区間新には遠かった。

順位は変わらない。7区、家高がタスキをかけた。快調に飛ばす。

前をいく日体・順天堂を追う。なかなか捕らえられないが平塚中継所前で、順天堂をだし抜き5位に。悲願の区間賞には届かなかったが、区間2位。主将のケジメをつけて、8区・奥田実(文2)につないだ。

そして、168センチ、55キロの2年生が初舞台のクライマックスを演じるのである。

5歳から年季の応援

再び、遊行寺付近のOBの熱き心。■ハコネ人⑧河原邦夫さん(50年商卒)

「駅伝や陸上が好きで、毎年個人で応援しています。もう、私の年中行事ですね。小学校のときから、ずっと見ているんですから。中大は、いつも上位なのでとても楽しみですよ。

今年も、往路大ブレイキの翌日のドラマがとても楽しみですよ」

陸上部OBの姿も。金子繁夫さん（33年経卒＝砲丸投げ）、鶴田明邦さん（33年経卒）、……ここでは代表して、

■ハコネ人⑨西島一光さん（26年経卒＝400メートル障害走）

「5歳の時から箱根駅伝を沿道で応援していますよ。毎年期待をしていますが、今年の家を出る足が重かった。メンバーの層がやっぱり薄い。文武両道だから仕方がないが」「昭



和27（52）年に戸塚選手の付き添いをしたときに、5人がブレイキをした後で、4人が区間賞を獲得した年もあった。ちなみにこの年は総合3位。ファイトのある選手が中大にはとても多かったんだ。私は中大には3年次に海軍から編入したこともあり、3年間しか在籍しなかったけどね。昭和11（36）年のベルリンオリンピックの翌年の箱根駅伝も見たよ。当時のオリンピック選手は学生であり、翌年の箱根駅伝にはオリンピック4位の村社講平選手（中大）が走った。その頃はよかったな。ちなみに私が小学校5年のときですよ」

奥田「区間新」4位↓森3位

テレビ中継は7区でトップに立つ

た駒沢、それに東海、日大の2、3位争いに集中していた。お茶の間に奥田の姿はほとんど届けられなかった。ノーマークだったのだ。だが、

だれよりも早いピッチで快走していた。「区間新の可能性」を伝えて、映像が奥田に変わったのは13キロ付近である。両手を時折ブラブラさせて、肩の力を抜いた走り。時計も見なかった。いや「ストップウオッチを押すのを忘れた」のだそうだ。順天堂を難なく抜き去り、21・5キロを1時間4分26秒、トップ・駒沢選手のタイムを3分近くも凌ぐ区間賞。しかも歴代2位の記録だ。初めての大会でここまでの活躍は中大チームとしても「望外」の新エース誕生



9区・森勇喜

である。単独4位に立った。

裏のエース区間・九区。森勇喜（法2）が失速気味の東海を抜き3位に浮上。さらに日大を追うが、「足の豆がつぶれて」後半ペース・ダウン。10区のアンカー・田村航（法3）にすべてを委ねた。

田村が2位・日大を追う。その差約2分。

アンカー田村、わずかに1秒差

「中大が復路優勝しそうだ」という声があちこちで聞こえ始めた。昼の1時を回ったあたり。大手町の読売新聞隣にある産経ビル前広場にはオーロラビジョンが据えられ、多く



10区・田村航

の観客がレース終盤の展開に目をこらした。高橋ら中大選手もかたずをのんで見守る。「復路優勝より、総合順位だよな。がんばれ田村」。高橋が仲間に話すのが聞こえた。

日大との差を詰める田村。その田村の後ろから区間賞となった日体・山田が迫っていた。日大も3位に落ち、それを追う展開に。田村は猛然とスパートした。日大にぐんぐん迫る。距離がない。そのまま、ゴールした。日大にわずか1秒差の、総合4位。復路優勝も逃したが(復路2位)、力を出し尽くした、中大の底力を見せつけた堂々の結果といえた。

フィナーレのドラマは後続のシード権をかけた10位争いだったる。神奈川か、早稲田か。区間新のタイムで100メートルに迫りながらも悲願のシード権に届かなかった早稲田・高岡は、仲間に詫びるように手を合わせ、泣き崩れた……。

母校への視線、声援はむろんだが、一瞬それを忘れさせる、学校差を超えてあるアスリートたちのドラマの全体がハコネにちがいない。

「じつとできずに盛岡から」

ゴール近くにも、「中央大学 箱根駅伝を強くする会」ののぼりがあつた。父母連絡会でつくり、結成17年めになるそうだ。「総勢500人の会員で、沿道の人に約2000本の小旗を用意してね。配り終わっても、旗をほしいと言ってくる人がたくさんいましたよ」と朝倉さん。

■ハコネ人⑩吉田敏彦さん(39卒
同会会員)

「昨日の駅伝をテレビで見てもたつてもいられなくなつて、朝6時の新幹線で盛岡から来ました。自分自身も、ここ何年か毎日10^{キロ}走っているからね。上野選手が、最後まで諦めなかったのが、二区の高橋選手以降のファイトにつながっているんです。すばらしいよ」

■ハコネ人⑪上岡君義さん(同会副会長・中大理事)

「最初出遅れてしまったけれど、やはり勝利へのこだわりが選手にはあるよね。そして、僕らが合宿に激励に行ったときに感じたのは、

チームワークの良さ。礼儀正しくて、明るく、とてもいい雰囲気だった。その雰囲気、追いつけに繋がっているんだと思う。高橋選手が、自信に満ちた顔をしてきていたのも印象深いなあ」

上岡さんは話の途中でも、他大学の選手に「がんばれい！」と声援を続けた。

「限りなく1位に近い…」
「負けは負け」

2時を回つても、大手町一帯はレースの余韻に包まれていた。ゴール地点から500メートルほど離れた常磐橋公園で、中大駅伝チームのメンバーの「報告会」に移った。

田幸監督。「確実に力をつけていると思います。選手には、その努力に対してねぎらいの言葉をかけてやってほしいと思います」

家高主将が、上野から順に選手たちを紹介する。

「一番悔しい思いをしているのは上野自身です。来年に向け、がんばってほしい」

「(2区の)高橋が追い上げムードを作ってくれました」

「(6区)野村選手は、復路の勢い作りに貢献してくれました」

「(4区の)池永選手が次期キヤプテンをつとめます。がんばってほしい」……

自分自身について。

「区間賞を狙っていたので、満足の結果ではなかった。でも(箱根を)4回走ることができたし、卒業後実業団に入っても、がんばります！」



奥田(左)と家高

このあとパレスホテルに引き返して、「中央大学陸上部OB会」主催による慰労会。恒例の会だ。

「結果は4位でしたが、限りなく1位に近いものでした」

阿部理事長のあいさつが、大方の声を集約するだろう。

もちろん、苦言もあつたのである。高木丈太郎・「学員体育会」会長。

「お褒めのあいさつが多かつたような気がしますが、負けは負けですから。箱根6連覇を遂げているのは過去に中大だけ。来年は駒大に、そうはうまくいかないんだ、ということろを見せてやれ」

佐藤光信・OB会会長は4年間ハコネを走り、昭和31、32、33年(31年は優勝)と、区間賞をとり続けた往年のエースである。今と昔、違いが3つある、という。「食べ物、道路、靴! 道路なんか、昔は舗装なんかなくてデコボコ道だったんだから。今は、じゅうたんの上を走っているようなもの。靴だって、今は3分の1の軽さだよ。そうやって考えると、あとちよっと選手にはやるべ

きことを頑張ってもらいたいな」

そのことを一番感じているのは選手たち自身だろう。田幸監督はこう言った。「今回は優勝を前面に打ち出したレースでした。駒澤大学と1回も、またしても絡めなかつたことが残念でならない。しかしながら、随所で選手たちはいいものを見せてくれました。勉強になりました。まだまだ成長途上の監督ですので、今後ともよろしくお願いします。明日から、また箱根へ向けてがんばります」

家高主将。「負けました。完敗です(爽やかな顔で)。優勝したかったです。しかしながら、個々の力は明らかについてきており、全体が優勝しようとする力があつた、それが結果としての4位へつながったのではないかと思います。改めて勝負の厳しさを痛感しました」

料理を手に、選手たちの表情がようやくよくなごんでいく。その輪を見つめながら、先の佐藤OB会会長は話した。「チームワークは、とてもいい。ぜひ、来年につなげてほしい。」



慰労会

上野選手も、失敗を生かしてもらいたい。逆に、失敗を恐れちゃだめだよ。これで、上野選手と他の選手が、横一列になり、もつとチームワークもアップするのではないかな」

「アレッ!」と声をあげたのは、取材班のカメラ担当の猪瀬である。

「上野選手の頭の毛が、短くなつてない?」。1年先輩の長谷川選手がすこし笑って、教えてくれた。「上野は反省して、自分から坊主になつたんですよ」

「前夜はゲームにハマりました」

8区区間賞のニューヒーロー、奥田をつかまえた。「初めての箱根駅伝で、みんなのサポートがあり、緊張せずにレースを走ることができました。欲をいうと日大を抜きたかった。優勝が達成できなくて4年生には申し訳ない。自分としては、普通でよくもなく悪くもない走りでした」。普段着の、ホッとさせるフニキがある。「ゆうべはPSP(携帯型ゲーム機)を仲間が持っていたので、その「ミニゴルフ」にはまりました(笑)。もちろん9時にはベッドに入つて、そのうち寝ていました」とうち明け話も披露して、つづけた。「夜には高校の恩師の先生と両親から電話がありました。両親には20年間育ててもらつてありがとうという、感謝の気持ちを伝えました。高校の監督は、自分が高校時代から陸上を始めたこともあり、産みの親でもあるので、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。第2の親でもある田幸監督にも感謝の気持ちでいっぱいです」

熱き心、ハコネの思い

OBらの熱い心。ハコネとは何か。こんな声に代表されるだろう。

■ハコネ人⑫林靖人さん（39年商卒）箱根駅伝を強くする会

「箱根の魅力はなんと言っても、母校の名誉のために、毎年ひとつのタスキをつなぐことでしょう。選手や観衆からも、ひしひしと応援してい

る情熱が伝わるんだ」

■ハコネ人⑬前島一夫さん（35年経卒）同副幹事長

「在学中に6連覇を達成した。

ちようど、この時は公認会計士も司法試験も全国第1位の合格実績で、中大の栄光の時代でしたよ。ハコネはやはり1年の始まりという感じですが、これがなければ1年は始まりません。また、中大の大きな宣伝にも

05年箱根駅伝総合成績

(シード権は上位10位まで)

① 駒沢大学	11時間03分48秒	(往路②復路①)
② 日本体育大学	11・07・23	(往⑤復③)
③ 日本大学	11・07・48	(往③復⑤)
④ 中央大学	11・07・49	(往⑥復②)
⑤ 順天堂大学	11・08・47	(往④復⑥)
⑥ 東海大学	11・10・32	(往①復⑫)
⑦ 亜細亜大学	11・11・40	(往⑦復④)
⑧ 法政大学	11・13・53	(往⑬復⑦)
⑨ 中央学院大学	11・14・35	(往⑪復⑨)
⑩ 神奈川大学	11・14・49	(往⑩復⑩)
⑪ 早稲田大学	11・15・11	(往⑮復⑧)

なりますし、一生懸命がんばって欲しいです」

カイブツ君の復活

ハコネから3週間後、1月23日の全国都道府県対抗駅伝でまたミラクルが起きた。長野県のアンカーは上野。5区山登りでアツと言わせた日体・北村（兵庫）と抜きつ抜かれつを演じ、残り300メートルで、

一気に北村を抜き去り、長野連覇につなげた。「坊主」になった上野の、目にも見せた復活劇――。

はじめ長野のアンカーは、駒沢4連覇を決定的にした9区のエース塩川だったという。塩川に代えて上野を起用した監督に「チャンスを与えていただいて感謝します。これでまた、世界をめざしてがんばります」と上野は語った。

月桂冠を頭にのつけた上野と田幸監督のツーショットが、一瞬テレビに映った。若手選手の様子見に、あるいは上野が気になって、監督も駆けつけたのか。「コイツめ！」というように、田幸監督の顔が笑っていた。型破りの、やはり「カイブツ君」

とでも言うっておこうか。「今年がダメなら、しばらくダメだ」という声があった。それだけ期待は大きかったのだが、来年への期待はむしろおおきくふくらんできた。新主将・池永が、田村がひびく。新ヒーロー・奥田がいる。カイブツ君の復活……。

06年への、多くの好材料と教訓を

残して、第81回箱根駅伝は終わった。

◇

沢木耕太郎『敗れざる者たち』（1976年刊）には、マラソンランナーも登場する。東京五輪（64年）の男子マラソンで3位の殊勲を残しながらのちに自死した円谷幸吉（42年・中大経卒）である（「長距離ランナーの遺書」）。陰影に富んだ6編を描き上げた若き日の著者は、デビュー作の「あとがき」をこんな文章で閉じている。

《いま、無人の競技場にボクサーが、ランナーが、バッターが、サラブレッドが、騎手が佇む。あなたには、彼らの曳く長い影が、はたして見えるだろうか》

田幸・中大駅伝チームは池永主将を先頭に、第82回ハコネへ、始動した。

【学生記者取材班】福田成幸（法4）
+ 西原香保里（経4） + 津江瞳（文3）
+ 猪瀬智巳（商3） + 滝沢孝祐（総2）

※掲載写真の一部は「中大スポーツ」、放送研究会提供。